No.57 November 27,2003

UIFA JAPON NEWSLETTER

■　主な内容

平成15年度　東京ウィメンズプラザの助成金がUIFA JAPON設立10周年事業に！！
国際女性建築家資料館-IAWA-のアドヴァイザー会議に行ってきました！
「学校のトイレを考える」NO2
　学校のトイレを変えよう
私らしく働く一地域で、組織で NO3
　ＮＰＯ法人グリーンネックレスと私
　自治体の中のわたし
UIFA会員の本
この指とまれ報告
川への関心が川をきれいに
役員会報告

8月26日、会長ソランジュさんの夏休みは次の大会の準備に追われている。写真：松川

平成15年度東京ウィメンズプラザの助成金がUIFA JAPON設立10周年事業に！！

正宗　量子

UIFAの創立から40年、そしてUIFA JAPON設立から早や10年の月日が流れた。その間に開催された13回の世界大会、アジアの隣人韓国と交流、第12回UIFA世界大会に世界の会員を日本に招聘したりと、その活動には目覚ましいものがある。

今年は10年目の区切りで、様々な行事や事業を展開中で、その一助にと平成15年度の東京ウィメンズプラザ民間活動助成事業に応募した。事業名は「UIFA JAPON設立10年の歩み、デジタルプレゼンテーション作成」である。面接を経て、目出度くタイムリーに今年度の助成金を頂く事に決定した。東京ウィメンズプラザ事業の目的は、民間の自主的な研究や活動に対し個人や団体に補助金の助成を行い、東京における男女平等参画推進に関る自主的な活動の促進を図り、男女平等参画社会の実現と達成にあるという。難解ながらグローバルな視座で活動している私たち女性建築家の小国際団体にも、社会に認知されるチャンスがあり、その微かな光の道が開かれつつあるのを感じる。年毎に重要なテーマは変るが、その活動が公的な目的に沿い皆に役立たねばならないのだ。主な活動拠点が東京にある、政治・宗教団体に属さない、非営利活動グループである、期間は1年間、事業終了後2ヶ月以内に実績報告書を東京都知事に報告する事等など条件を満たすための作業が直ちに必要で、会員の協力なくしては遂行することはできない。

既に、去る4月、ド・ラ・トゥールUIFA会長を招き名古屋能楽堂で会長の講演会、交流会、伊勢神宮や鳥羽へツアー、そして、写真展「わたしにとってのユニバーサルデザイン」に至っては、実に多様な女性視点が盛り込まれ、内容豊かな感性を感じるデジタル化の素材は既にスタンバイしている。どうアイデアを練り料理し完成させるかぜひ皆様の潜在している知恵を集結したい。この10年の歩みは、UIFA JAPON発展の基礎固めの期間だった。内外の交流を更に深め、社会に貢献するための基盤の時代とそのデジタル化に興味がありご協力して下さる会員は、是非事務局までご連絡をお願いしたい。

国際女性建築家資料館—IAWA—のアドヴァイザー会議に行ってきました！

松川　淳子

米国のヴァージニア州立大学の中にあるIAWA（International Archive of Women in Architecture＝国際女性建築家資料館）—おなじみのミルカ・ブリズナコフさん（ヴァージニア州立大学名誉教授・UIFA会員）によって1985年に設立されたこのアーカイヴは、UIFA本部とも緊密な連携を持ちながら世界の女性建築家資料を収集しています。

2003年9月から3年任期のアドヴァイザーに選ばれ、年次総会へお招き頂いたのを機会に、名前だけしか知らなかったその存在を確認しようと、会合日程が日本の連休に重なっていたのを幸いに、アーカイヴに行ってきました。

州立大学の教授陣を中心に運営されているこのアーカイヴの年に一度の会合には、世界各地からアドヴァイザーが集まり、次の一年間に向けて活動の方針や行事、予算などについて検討するのです。今年は、パキスタンのヤスミーンさんなども含めて、15人ほどのアドヴァイザーが集まり、ポットラックによるランチや湖への遠足など楽しい行事も織り交ぜながら、アーカイヴ（資料館）の活動の推進について検討しました。新米アドヴァイザーの私も、来年はあの喧々諤々の議論の輪に入る方策を整えなくてはなりません。

アーカイブのツアーを終えて図書館前のアドヴァイザーたち

ヴァージニア州立大学のニューマンライブラリで行われたアドヴァイザー会議　写真：松川

＊IAWAについては、報告会を予定しています。いずれ詳細をお知らせします。

学校のトイレを考える

no.2

学校のトイレを変えよう

小林　純子

■学校トイレにいけない子どもたち

過去、トイレは4Kと言われ、多くは劣悪な環境でしたが16～17年位前から商業施設をはじめ、駅、公園、オフィス、住宅等多くの場所でトイレの改善が急激に進みました。学校のトイレは、それから10年遅れて動きがはじまり6～7年が経過しました。学校トイレにいきたくないとの子どもたちの声がマスコミに取り上げられたのも動きの引き金の1つになったようでした。日本トイレ協会や衛生機器メーカー等で造っている学校トイレ研究会が、全国各所で教育委員会等を対象に現状を考えるセミナーを実施し、さらに、関心が高まっていきました。

我々の事務所がはじめて学校トイレの仕事を依頼されたのは1997年で、私立の女子中学校でした。少子化に伴う入学者数減少に何とか歯止めをとの目的でした。次は、財政難で学校の改築が進まない中、子どもの学校環境の改善を少しでも向上しようとトイレの改修を行うことにした世田谷区からの依頼でした。調査を進めていくと、2～3割の子どもたちは、排尿さえ我慢していることがわかり異常事態だと思いました。また、現地の多くで見たのは、寒々しいしみだらけのテラゾー塗りの壁、狭く簡易過ぎるブースの壁等々、男女の区画さえないのもあり、衝撃さえうけました。これでは、子どもたちの気持ちは当然と思う一方で自分の昔使った学校トイレを思い出しました。

学校環境の劣悪さは、昔のほうがひどかったことは明らかです。また、最近の住宅や公衆トイレの快適化との差を差し引いて考えてみても、何が何でも我慢してしまうのには疑問が残ります。

藤村中学校の丸い鏡のある手洗いコーナー

要因はハードな面ばかりではなく、心理的な問題も含んだソフトな面と複合されているようです。さらには、我が国の経済的、物理的に恵まれた環境の中で、子どもに限らず人間の環境への適応力の幅が狭くなっていて、食べる、寝る、排泄するといった人間の生物としての生きる原点の部分が弱くなっているのではないか。そのため、トイレにいくのが恥ずかしい、からかわれる、いじめられるとの声は、排泄が人として健全に捉えられていない現れと思えるのです。

「変わる学校のトイレ」　小林純子著
草土文化

一人になれる居場所、我慢しないで行きたくなるトイレ、子供達の思いや、声なき希望を一緒に考え、楽しいトイレを実現した著者の英知がここにはある。豊富な図,表,イラスト、読みやすい文章。　(中野)

■みんなで考える学校トイレ改修

改修にあたっては、排泄の意味やトイレの役割、人と心地よく使いあう方法、掃除の仕方等の現実的側面と同時に、トイレの歴史、世界の人のトイレの形など幅広く学習し、トイレに興味を持たせながら造ることにしました。また、自分たちのトイレとの意識を強化するため、設計途中も子どもたちの声を聞き進めていきました。完成したトイレは子どもたちの学校の自慢の1つになりました。また、みんなが楽しんでトイレに行くうちに、彼らにとってトイレがあたり前の場所にもなっていきました。

改修後の丸い壁のある新トイレ：いくつかのスケッチから満場一致で子供達に選ばれたプラン。理由は「学校には丸い所がないから」。

■今後の問題、UIFAへの期待

参加型のトイレ改修は広まっていますが、様々な問題も見えてきています。1つは、拡大しているとはいえ、改修に着手したトイレは、全国で34,000校もある公立小中学校の中では焼け石に水の状態であることです。2つ目は、きれいなトイレを維持するために清掃が追いつかないことです。清掃の教育、清掃のシステムの検討、また、清掃性のあるトイレ造りのための建材や機器開発が望まれます。3つ目は、コストの低減化です。清掃性はコストと密接に関係があります。少ない全体予算で多く改修するために質の担保がままならないのが現実です。それでは冒頭の図の子どもの絵のようにホッとできる空間造りは難しくなります。

4つ目は、参加型の設計は、時間と労力がより多く掛かりますが、設計者選定は設計料の入札によるもので、現実的には実現が厳しいことです。設計者としては、半ばボランティア的に、要望を大切にし、丁寧に造っていくことが求められているのが現実といえます。

また、一方、コストの関係から今行われている改修には、間仕切壁や便器のみの取替えで終わっているケースも多いようです。せっかくの改修を子どもたちの今後に生かし、トイレに行けない切実な子どもたちを救うためにも、また、トイレの改善を学校全体の環境を変えるきっかけにするためにも、なにか有効な方法を見つけたい。

今後のUIFAの活動に大きな期待を寄せています。

(写真・図は『変わる学校のトイレ』より)

私らしくはたらく-地域で、組織で　N03

＜地域で＞

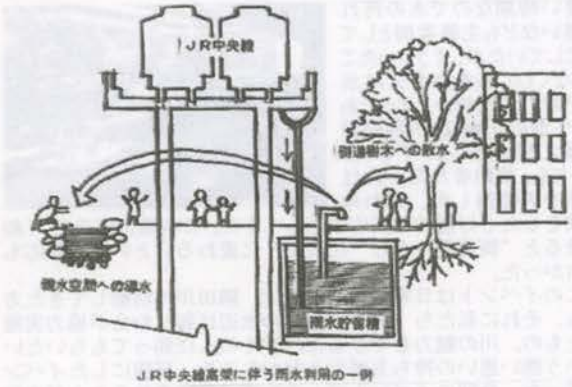
ＮＰＯ法人グリーンネックレスと私

—東京多摩地区の地域活動—　　林屋　雅江

■グリーンネックレス（ＧＮ）への参加

GN は、99 年の夏、JR 中央線三鷹～立川沿線６市を舞台に発足した。当時小金井市の都市計画マスタープラン策定委員をしていた私は、市民サイドのまちづくり活動を知りたくて、早速参加。その後 02 年のＮＰＯ法人化とともに理事として、現在に至っている。

GN は、ＪＲ中央線高架化事業に伴うまちづくりへ市民参加の場の提供、市民・行政・計画者・企業・大学を含めた協働体制の構築に、ＮＰＯとして進行役を努めるなどである。小金井市の場合「ひと、水、緑、ふれあいのまち小金井」を鉄道高架化事業に反映させて、環境共生軸の実現を願うものである。下図は高架橋に降る雨水利用のイメージ図で、雨水（17 万トン／年）を貯水槽にため、側道街路樹や、周辺の植栽への散水、親水空間（ビオトープ、公園など）への導水、緊急時の水供給などを提案するものである。



イラスト：林屋

■３つのプロジェクト

全ての活動は高架化事業と関わっており、３つのプロジェクト「水環境」「駅舎デザイン」「まちかど広場」に大別される。また、市民参加の契機づくりとして、「小金井を歩く会」を結成、市内をユニバーサルデザインの立場からチェック、さらに公共施設の障害者用トイレ約 100 箇所の実測資料も女性会員（GN の監査役）が収集しているので、これらを、提案・改善に向けて図面化を（地元法政大学の協力）した。このまちづくりのチェックは、法政大学、東京学芸大学の教員、学生との協働・連携へと繋がっている。

このようにＮＰＯ活動を通じて地域の「人の輪」の波及的な広がりは、感動的ですらある。私自身老後も住み続けたいまち･小金井への期待をこめて、そして、設計家としても勉強になり、得ることは大きい。

会員の多くは企業人であり、専従者が居ないこともあって、活動時間には制約がある。今後各種の活動の推進役として、専門性のある退職者、主婦に求めているが、思うようにはいかない歯がゆさがある。従って、私や地域で仕事をする編集者など、自営業で時間のやりくりが可能な人に雑務が集中しがちある。ことに、イベントの直前には、超多忙となり自問自答、反省することもあるが、また、やりがいのある仕事（ボランティアよ！）でもある。

＜組織で＞

自治体の中のわたし

石川　和代

■営繕課に異動して６年

私の職場は台東区都市づくり部営繕課。自治体職員です。自治体の建築職には大きく分けて、建築行政、営繕行政、まちづくり行政の３つの仕事があります。営繕課はその名の通り営繕行政を担当しています。具体的には、保育園や学校、区民館等の区が所有する建物の改修や新築工事の設計および工事監理が主な業務になります。

私は入区当初、建築課で行政指導を担当していました。その後、営繕課に異動して今年で６年目になります。最初はペンキの塗替一つとっても、何一つ知らない事ばかりでした。工事が一件終わるごとに覚えた事が少しずつ増え、最近になって、ようやく大抵のことは、自分なりの対処が出来るようになってきました。

■中学校の大規模改造工事を手がけて

耐震補強、設備の充実と共に、プランや外観も変更し、明るいイメージになった葛飾区の中学校（左上：施工前、右：施工後）

写真：石川

とりわけ、今年３月に完了した、中学校の大規模改造工事は設計から施工まで全てを担当し、多くのことを学んだ現場でした。ただし、設計業務は設計事務所に委託し、私は工事監理が仕事でした。

この工事は学校統廃合に伴う校舎整備だったため、父兄や学校の先生方からの期待や要望も大きく、教育委員会の要望も「従来の学校のイメージでないものを」というものでした。この要望を満たすため、まず事務所には外観イメージの変更を指示しました。躯体は、耐震補強をする以外は既存ですから、設計者には随分悩んでいただいたことと思います。結局、柱型にアルミパネルで化粧をし、４層オーダー風にしました。この外装に金属系の素材を使うことをはじめ、材料選択や色遣い等は随分、自由にやらせていただきました。結果的に、その色遣いは上司から「女性らしい」と評価され、なるほど個性とは一生懸命やれば自然と滲むのかと一種の自信となりました。

空間的には「きれいなトイレ」が一つのテーマになり、以前の倍の、ほぼ教室一つ分の広さに相当するスペースを確保し、明るく高級感のある仕上げにしています。

こうした事の一つ一つを時に設計者や施工者と、時には先生と、或いは上司やその他の方達と、口角沫を飛ばしながら議論し作り上げる事は、知らぬ間に私に力をつけてくれたようです。

これからも一件一件の工事を大切に、前向きな議論を尽くした仕事をしていきたいと思います。その経験や達成感は私の財産であり、建築行政やまちづくり行政に携わる時にも味わいたいと思っています。

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町2-6-5
麹町E・C・Kビル (株)生活構造研究所内
TEL 03-5275-7861 FAX 03-5275-7866
メールアドレス uifa@LIQL.CO.JP
発行 2003年11月27日

■UIFA 会員の本

住空間の家族学「心・体」感覚で考える
山田初江著 彰国社

「住宅」から「道」へ「道」から「街」への視点をもつ、その住空間を実現させる手がかりとして伝統の知恵に学ぶ、としつつ新しい考え方に基づくデザイン、環境への配慮、暮らしへの豊かなしつらいが絶妙なバランスで組み込まれている。「心・体」が主題であって、形態、技術などは副題の手法であるといいつつ、設計、施工技術、ディテールにいたるまで細心の配慮で創られる住空間はすがすがしい。空間と家族の営みを融合させた住空間の家族学。林・山田・中原設計同人の山田初江さんの新著。次代に引き継ぐ心配りに満ちた一冊である（渡辺）。

■この指とまれ報告

ゆったりと豊かに—富田玲子さんと宮代町を訪問

永井 彩子

好天に恵まれて、田園の町を訪れるにはまことに気持ちの良い日だった。最初に進修館、草の生えたなだらかな斜面にゆったりと広がった建物、20年を経て建物の北側は、町の特産の葡萄色のグラデーション、南側はピンクから淡いオレンジ、黄色に塗られてやさしい印象になっていた。時を重ねてまわりの自然と溶け合い存在感を増していた。中に入れば、木製の建具からのやわらかい光を受けて輝いているウッドブロックの床。こんなに美しい床を見たことがあるだろうか。木の椅子に座ってまずお茶。きれいなカーヴのテーブルにも葡萄のガラスがはめ込まれている。各部屋の間は一転して眩しい光があふれ、明暗処理の巧みさを感ずる。

公園の間を通って笠原小学校へ。瓦屋根の重なりを遠望しながら近づく。町のシンボルとしての学校という理念がよく理解できる。子供達はみんなハダシ（冬もだそうです）。イキイキとしている。教室からそのまま庭へ走り出せるようになっていて、いろいろな形の足洗い場が通路毎に造られている。あちこちにアルコーブや魅力的なしかけがあって、遊びの場や居場所になっている。学校全体が生きていることが実感できる。はじめ600人だった生徒が今は250人と少子化が進んでおり、また合併問題で揺れる町が今後どのように変化してゆくのか見守ってゆきたい。

のどかな田園の真っ只中をゆっくり歩いて斉藤家住宅へ、美しい屋敷林に囲まれてゆったりと配置されたシンプルな住まい、土間の吹き抜けは力強い構造を見せ、木肌の美しさにしばし見とれてしまう。

渡辺さんのしっかりした資料もあって、本当の豊かさとはなにかを考えた、収穫の多い秋の一日だった。これだけのものを造り上げるエネルギーがどこにひそんでいるかと思わせる物静かな富田さん。有難うございました。 写真：井出

川への関心が川をきれいに

須永 俶子

今年7月27日に江戸開府400年を記念して、日本橋川、神田川、小名木川という3本の川を船で巡るという催しを実施した。その前日、川をめぐる街づくりについて経験者に語ってもらうというシンポジウムを日本橋川沿いの三菱倉庫ビルで実施、実践編として船に乗って3川を一回りして東京の橋や風景を実際に見て考えてもらおうという趣向だった。300人の募集にその倍以上の申込みがあり、その関心の高さにまず驚かされた。30人乗りの漁船6艘を三崎橋（千代田区）と高橋（江東区）の2ヵ所の防災船着場から3艘づつ出発させ、午前午後の2回走らせた。この他NPO地域交流センターの協力によりEボートという組立の船と、東京商船大学（現東京海洋大学）の10人乗りの練習船と伝馬船を出してもらった。伝馬船は江東区の和船の会のメンバーが出向き、櫓さばきを披露。この常磐橋から日本橋までのミニクルーズも大人気で、あらかじめ告知しなかったにもかかわらず、200人も乗って好評だった。

暑い時期なので水の汚れや臭いなども主催者側として気にしていたが、そういったこともなくむしろ参加者には水辺が魅力的に映ったようである。午前の干潮により漁船が座礁するというアクシデントがあっても、乗船者たちからは自然を再認識した、思わぬ経験をしたと好意的な反応が返ってきた。日本橋川担当の、「船に乗ると“街時間”から“川時間”に変わる」といった反応も面白かった。

このイベントは日本橋川、神田川、隅田川で活動してきた方たち、それに私たちNPO江東区の水辺に親しむ会が協力実施したもの。川の魅力をできるだけ多くの人に知ってもらいたいという熱い思いの持ち主ばかりだからこそ、可能にしたイベントだった。今回のイベントで、これまで意識されることが少なかった川のファンをまた増やすことができたと思う。

川は注目されることによりますますきれいになる。川への関心を持つ人か増えることにより、水辺をどうしていったらいいかについてもみんなで考えることが出来る。協力した各団体の方たちからのまた来年もやりたいという反応に、十分手ごたえのあるイベントになったと感じている。 写真：須永

■役員会報告

第5回 2003年9月17日（水）
議 事：USAのIAWAの会議に松川副会長参加報告。東京ウィメンズプラザの助成金が、「UIFA設立10年の歩みデジタル化」に対しおりる事に決まり、高橋理事を中心のチームを編成する事となった。NEWS LETTER55号までの合本10部の作業完了。今後製本し各関係先に配布を検討。「ユニバーサルデザイン」小冊子化財源の検討に入る。

第6回 2003年10月15日（水）
議 事：今年度会費集金状況報告。NEWS LETTER今後の課題について審議。次回海外交流の会について決定。デジタル化10年の歩みスケジュールどおり進行決定し、データの収集開始。UD小冊子販売を目標に編集開始。

和田英一建築株式会社

TEL03-3493-1541 品川区 広町1-3-22

木造～RC造 設計・施工

■編集後記

最近、食欲の秋です。他のことにも貪欲になりたい、今日この頃（石川）。ユニバーサルデザイン英文併記の冊子化進んでいます（井出）。富田さんとご一緒の宮代町見学会、秋の遠足のような楽しい一日でした（田中）。オリジナルな視点を持つ先人を見つけてますます魅力倍増（中野）。優れた創造物に出会うと心が豊かになり、生きていることが楽しくなります（渡辺）。国際情報満載のニューズレターにしたい。皆様情報提供を（編集長：須永）。